

隨  
筆



## 私と車

青木 曉 雲

今から35年程前、NHKの日本とドイツ車の違いをテーマにした番組がありました。ドイツ車と日本車を車の強度実験を通して比較する番組でした。比較対象車はドイツ車はVWゴルフで日本車はカローラだった様な気がします。その結論は、車の剛性の面でドイツ車が圧倒的に優位というものでした。この番組は自分にとって非常に印象に残った番組でした。

車作りには何が一番大切か。デザイン、室内外の装備よりも何よりも人間の生命を守ることが優先されるべきだという思想に単純に感動しました。その点、スウェーデンのボルボもドイツ車と同じです。不完全である人間が車を運転する限り、事故は避けられないという前提で車作りをする。速度無制限のアウトバーンを長時間疾走するので、万一事故が起きれば大変です。運転席はコックピットでなければならぬ。当時の日本では事故は真正面の衝突しか想定していない時代で

したが、ドイツ自動車連盟の実験は、オフセット衝突（車の左片側同志の衝突）を想定していました。この番組によって私は車作りとその国の「文化」に興味を持ちました。

外車遍歴の始まりは、ベンツ230Eでした。ベンツというメーカーは高級車メーカーではなく、様々な車の総合メーカーです。当時日本ではベンツは今ほど頻繁に走っていない時代です。横浜新道を試乗してこれはいいなとすぐに決めました。（実際は小学生の息子がお父さんこれを買おうよ！という一言）当時の日本車には感じられない重厚な安定したハンドリングと走り、ドアを閉めた時の卓越した気密性、車の下回りの特殊塗装等々。「さすがベンツだなあ」という感動を覚えたものでした。その後300SEに乗り換え、車の一つ一つの装備について、「なぜ？」のようなのを考えさせられ、その都度車文化の違いに納得させられました。その後、VWゴルフでは、そもそも車は機械ものという前提から、エンジンの振動と重厚な音を主張するような作り。また、アメリカ車ではマスタングから始まりエスケープ（RV車）・リンカーンコンチネンタルを2台・タウンカー等のフルサイズカ

ーにも乗りました。当時アメリカ車は故障しやすいとの定説があり不安もありましたが、電子部門以外は特に壊れませんでした。アメ車は日本の車と比較して作りがおおざっぱでしたが、それも逆に面白く感じたりもしました。アメ車は大陸を長時間走るのにはタフな車である必要と、標準装備に救急セットが付いているというのも発想の違いを感じました。しかもゆったりと座れるソファーのようなくつろぎ感ほまさにアメリカらしさを感じました。

今35年にわたる外車遍歴に終止符を打ち、やっと日本車に乗り換えて8年。長いブランクがありました。日本車の「標準」という信頼性の高さは日本人の嗜好に沿ったものだと思います。

現代はグローバル化が進展し、車作りにおける文化の違い・個性が失われてきました。同じような車が世界中で作られ、エンブレムやスタイルだけでしか特化できない車ばかりというのは残念な気がします。以前に感じたような「面白さ」がなくなりました。

## 何時か帰ってくる子ガメのために

東 善治

私は、藤沢に住み始めて37年になりますが、退職当時市に「市民記者」制度があり、記者として市のポータルサイトへ主として藤沢の自然をテーマに投稿していました。

その中で、今でも忘れがたい記事は「ウミガメ」が鵜沼海岸で約30年振りに産卵し、それを取り上げたことです。（この情報は、藤沢漁業協同組合の関係者より取材したものです。）

その卵は、2か月後に無事ふ化し、「子ガメ」となつて海へ帰って行きました。何と、その当日漁の網に「親ガメ」が掛り「子ガメ」を迎えに来ていたことが確認されました。その漁業関係者は、「当然掛つた親ガメは放流しましたが、「ウミガメ」の世界でも親子の愛情に変わりありませんね。素晴らしい自然の摂理です。」と語って下さいました。翌年に、「親ガメ」の上陸を記事にすべく、一年首を長くして待ちました

が、ある時「ウミガメ」が江ノ島の岩場へ打ち上げられたとのこと。その原因が、餌のクラゲと間違えて、プラスチックゴミを食べて窒息したとのことです。

現在、世界の環境会議で、主要課題として取り上げられている「プラスチックによる海洋汚染」問題が、ここ藤沢でも身近に迫っていることが実感させられます。

我々個々人の力は限られていますが、藤沢市民として、海へのプラスチックの流失を防ぐために、引地川の清掃や鶴沼海岸の清掃活動等へ、年齢の問題もありますが、出来る限り参加して行きたいものです。

美しい藤沢の自然への回帰を。

何時か帰ってくる「子ガメ」のために!!

## 町内会館顛末記

てんまつ

井口 鐵介

町内会館に入ると土間があつて、銃剣術に使う木の銃が四、五挺ずつ左右の壁に立てかけてあつた。先端にはゴムの「たんぼ」が取り付けてある。突かれた相

手が怪我をしないためである。土間を上がると小学校の教室を二つ合わせたほどの板の間で、剣術の稽古には十分な広さであつた。正面には一段高い舞台がしつらえてあり、講演会や演芸会など様々な催しに使用された。その裏は畳敷きの和室で、町内の会芸に使われ、ときに演芸会の楽屋にもなつた。

映画などで知るだけだが、南の島のジャングルで、圧倒的な兵力を有する米軍に追い詰められた日本軍は、弾薬も食料も使い果たし、最期の白兵戦を挑む。銃の先に帯剣を装着して未だ明けやらぬ敵の陣地に突撃する。そのための訓練が銃剣術であつた。

私がつ通つていた藤沢第一国民学校の片隅には青年学校の校舎があつて、その廊下にも同じような木銃がずらりと並んでいたように思う。

昭和一〇年四月に公布された「青年学校令」により設立された青年学校の多くは小学校の敷地内に併設された。尋常小学校の六年を終えて家業に就いて働く農家・商家の若者たちを無償で教育するための学校だつた。しかし、戦況が悪化してくると、戦争遂行の国策に従い心身の鍛錬が重視され、体操の時間に銃剣術が盛んに行われた時期があつたのだろう。

私たちの町内会館も先輩たちが青年団活動の中で苦勞して建設したと聞いていた。今となつては、その苦勞話を聞くすべもないので勝手に想像するだけだが、木銃が並んでいたことから推測すれば、国策に協力することを条件に、なにがしかの補助金を得て、やつとのことで建てられたと考えられる。しかし、私が小学校低学年だった昭和一九、二〇年のころ、木銃はほこりだらけで、それを使うはずの青年たちは赤紙一枚で徴兵され、既に出払っていた。銃後を守るのは年寄り・病人・女子供で、私の母も国防婦人会から呼び出しをうけ、「もんぺ」姿で防空頭巾をかぶって出て行った。パケツリレーや竹槍の訓練をやらされていたという。その婦人会で親友になったMさんが、「そんなに一生懸命やらなくていいのよ。裏の原っぱで休もう。私、班長と知り合いだから平気なのよ」と言うので、二人で大いにサボッタという話を母から聞いていた。

「玉音」放送が流れて敗戦となり、いよいよ米軍が上陸して来るという時、普段は世話好きで朗らかなMさんが勝手口から飛び込んできて、「井口さん、一緒に死のうね！」と言つて母の手をとり泣いていた。子供の私には分からなかったけれど今考えてみると、戦

陣訓の「生きて虜囚りよしゅうの辱はづかしめを受けず」という覚悟が母たちにあつたとは思えない。ただ、敗戦国の婦女子は凌辱を受けるといふことがその頃の常識として伝わっていたのだろう。

血色の良い若い米軍の兵士たちは全員ジープに乗り銃口を向けて遊行通りをゆつくりと進んで行った。私は庚申堂の脇でそれを見ていたけれど何事も起こらなかった。

「立派な軍人になつてお国のために尽くせと教えていたのに、敗戦と同時に手のひらをかえすように民主教育に転向した」と、学校の先生を非難する人々がいた。しかし、変わり身の早さは先生たちに限らなかつた。大人たちは銃剣術の訓練のための床板に白い粉をまいて滑りをよくし、「スロー・スロー、クイック・クイック、スロー」と社交ダンスに熟中した。

町内会館は昭和四〇年代に取り壊され、今はコインパーキングになつている。

## 日光にて

市川光治

(文芸光風)

ペンションから、ハイキング姿で出かける時、

「今日はどちらへお出かけですか？」と五十年配と思しき主人に聞かれた。外は曇っていて、観光日和とは思えない難い。

「中禅寺湖から戦場ヶ原へ行こうと思うんですが」この天気じゃあ駄目だろうな、と思いながら言った。

「そうですね、あの辺は天気がいいですからね」主人がにこにこした。奥からゆったりした体格の小柄な奥さんも出てきて、一緒にニコニコしている。どうして天気がいいのかわかるのか不思議な気がした。

「そうですね、ここは猿が多いですね」

「そうですね。実のなる木を植えてもみんな食べられちゃうんです」主人が顔を顰めた。奥さんにはにこにこしたままだ。

「じゃあ、お世話になりました」

「お気をつけて」主人がぼそつと言った。

華厳の滝は霧で見えなかったが、中禅寺湖から先は晴れていた。戦場ヶ原は、それはよい天気であった。主人のいつた通りであった。

翌日は霧降亭を出立する目であった。主人に聞かれた。

「今日はどちらへ？」

外はシトシト雨が降っている。

「霧降高原にいかうか、小田代が原に行こうか、迷っているんですが、この天気じゃあ霧降高原は無理でしょうね？」

主人の顔が変わった。

「いやいや、雨といつてもこれくらいのは、日光では普通です。わたしはここで育ったんですが、この雨で諦めていたら一生霧降には登れませんよ。それに、万一駄目でも、その後で、戦場ヶ原に行っても十分時間はありますよ」

また、大丈夫と言われた。これでは霧降高原に行くほかあるまい。

「そうですね、じゃあ霧降高原に行ってみるか」

「そうしてみてください。天気はいいと思いますよ」主

人が愛嬌のある笑顔になった。

結論からいえば、主人の言うことは全く正しかった。

霧降高原は霧を突き抜けていた。真つ青な空が広がり、日光キスゲの群生がみごとであった。濃い霧が山の腹を漂っているのもよく見えた。

## ニジエールの微笑

梅澤輝也

この夏、アフリカ開発会議（通称ティカドTICA D）が、横浜で開催された。期間中、みなとみらい地区は躍動するアフリカの息吹と、鮮やかな色彩で活気づいた。

この会議は1993年の東京開催以来、今回で7回、横浜では三度目で、もうすっかり当地お馴染の国際会議となつている。

主要テーマは、当初のアフリカ開発援助という形から、次第に開発協力の形に進展し、今年は更に踏み込んだ経済協力の討議が、53か国および10の国際機関が

参加して、パシフィコ横浜で行われた。また関連展示やセミナーが、隣接の展示ホールや周辺ホテルで催され、JICAなど関連機関の催しが、多くの一般来場者を誘い、アフリカへの関心を大きく膨らませた。

パシフィコ界限を行き交う人々のなかに、大胆な色柄の民族衣装で装ったアフリカ婦人達や、腰高で引き締まった体にビジネス・スーツ姿の男性達がいる風景が、とても新鮮に感じられた。ホテルでは、軍服姿の恰幅のよい偉丈夫が数人の従者を率いて移動する情景や、ドレスアップしたご婦人方の優雅な振舞いも見受けられた。

私は、これまでボランティアとして、横浜でのティカドに毎回参加してきた。今回は8月27日から4日連続の活動で、会議関連の案内から、交通、観光、商業施設、ATMやトイレの位置まで「なんでもあり」で多岐に亘つた。

気温が37度を超えた蒸し暑い日だった。展示場の入口脇で、座り込んでいる二人のアフリカ婦人に目が留まり、私は声をかけた。「もう暑くて、歩いてホテルに戻れない」「タクシーに乗りたい」と訴えてくる。このニジエールからのご婦人の要請に、何とか応えた

いとタクシー会社に電話をしたが、『その辺りはVIP来訪で交通規制が厳しく、配車出来ない』と、つれない返事。流しのタクシーなど、あろうはずがない。徒に時が過ぎ焦燥感が募ってきた時、向うからタクシーが来た、目の前で停まり、客を降ろした、縋る思いで私は駆け寄り、ドライバーに行き先のホテルを告げる、引き受けてくれた。

『オナ・ドウラ・シャンス！』（ついでに〜）と、ご婦人達の声が弾み、疲れた顔に微笑みが広がった。タクシーの窓越しに「ボン・セジュール！」と声をかけると、二人から『メルシー・トウス』が合唱となつて返つて来た。

アフリカには54か国、12億3千万人の人口。世界の約6人に一人がアフリカ人、2050年には20億人に達すると云われている。総面積は日本の約79倍、豊富な鉱物とエネルギー資源、今後の高い成長発展が期待されている。

その若さ漲る活力に触れた今年の夏、私は今、あのご婦人達の微笑を思い浮かべ、ささやかな達成感と静かな満足感を味わっている。

## 炒飯

榎本礼子

過日夫の五十年來の友人Tさんの奥さんが急逝された。その二日前、お元氣な姿を見たばかりの私には到底信じられない知らせである。慌た、だしく葬儀が終わり二週間ほどしたころ、夫とTさん宅を訪問した。

葬儀場で放心状態のように見受けられたTさんのようにすが氣掛りだったが、案の定、顔が一まわり小さく感じられるほどにやつれて、すっかり無氣力なさま。

「お食事はどうしていらつしやるの」

店屋ものやスーパーパーのお菜で間に合せているが、食欲がなくてという返事。何とかしなくては……

生きていくには、着るより、掃くより、先ずは食べることである。夫を説得していくつかの料理を覚えてもらい、Tさんにそれを伝授しよう。

さっそく最も簡単な炒飯をと玉子炒飯を選んだ。材料と道具を揃え、手順を説明し、助手をして貰いながら仕上げる。

「思ったより簡単じゃないか」

見習いの感想である。しめしめと、一週間後材料だけは揃え、あとは全部おまかせで見学することに。焼豚や葱の切り方は雑だけれど、手順はよく料理法はダイナミックで、初めてにしては手際もよい。

火柱が上るほどの火力で鍋を焼き油を注ぐ。火が入るのではとヒヤヒヤしたが口は出さずに見守った。半熟のいり玉子に混ぜるあつご飯のタイミングのよさ、鍋をゆすると、きつね色のご飯がはね上る。仕上げに焼豚と葱を加え、正油が鍋のふちから入ると、香ばしい香りが鼻につき、思わずツバが滲み出る。パラツとした、私より上出来な炒飯だ。

「材料持参でTさんと炒飯パーティーでもやろうか」  
某日それは実現し、三人で炒飯ランチを作り、炒飯談議に興じながら食べ、こもりがちなTさんも大いに語り、食べ、楽しいひとときを過ごした。

一ヶ月が過ぎた。Tさんから思いもかけぬお誘いがかかった。

「海鮮チャーハンを作ってみたから来て」  
二人でということでも私も同行した。

「榎<sup>えの</sup>さん、中華料理屋で聞いたんだけど、油はラード

の方がカラッと仕上がるそうだよ」

その日の具は玉子、桜えび、ほぐした貝柱にグリーンピース。色どりもきれいで、塩、コショウもほどよいおいしさのチャーハンだった。

彼は私達だけでなく近所の人達も招いているようで友人もふえ話題も豊かになり、前のように明るい声と笑顔が見られるようになった。よかった。本当によかった。

おいとまの折、お仏壇にお参りする。供えられた海鮮チャーハンの香りに、写真の奥さんは、心なしか微かな笑みで応えていらつしやるように思えた。

## 上の子を大切に

笠原正義

今年、1月に二人目の孫が生まれました。女の子です。先に生まれた上の子は、もう3歳になります。こちらも女の子です。どうしても、上の子と下の子を比較してしまいますね。

その孫たちは、大阪に居ます。その孫のママさんが、

毎日インターネットで写真を送ってくれます。

そんなママさんは、下の子の世話で、まだ手が離せません。下の子が生まれてから、ママさんからの写真に変化が現れました。上の子が今までかわいくてしかたがなかったはずなのに、下の子の写真が多くなり、上の子の写真が減ってきているふうに感じます。上の子の笑顔の写真が減ったり、遊んでいる時の写真が減ったり、食べている時の写真などが多くなりました。上の子の気持ちが写真で伝わってきます。

そして、上の子にとってみれば、自分より小さな存在が我が家にやってくると言う事は、初めての大きな「戸惑い」ではないでしょうか。「一大事件」です。

2歳前後の子どもには成長過程で、自分よりも小さな生き物に興味を示したり、お人形遊びをしてみたりという事は当たり前の事ですが、妹が生まれて一緒に生活が始まるとなると、久しぶりの赤ちゃんの存在に、自分以外の家族が釘付けになるわけですから、表向きは喜んでいるように見えても内面はどうでしょうか？今はかわいいだけの下の子も、ずっと赤ちゃんのままではいません。成長すればイヤイヤ期がきたり、生意気なことを言ったりする時 comes。かわりに、さ

らに成長した上の子は、親の手が離れて、自分で何でもできるようになるし、相手の気持ちを推し量れる年齢にもなるでしょう。子どもは日々成長しています。

そこで、「今一番は上の子を大切にします。」ことでしょうか。子どもは親の行動を本当によく見ています。今までは自分だけが独り占めしていた両親の愛情も、半分になったと感ずることがあるでしょう。まず、無理のない限りは、上の子のことを優先してあげましょう。

例えば、名前を呼ぶ時の順番であったり、おやつの配り方であったりと本当に日常の小さなことでいいので優先してあげて下さい。ママさんへのお願いです。

さて、世の中の変化は早いもので、ポケベルに驚き、携帯電話に驚き、スマホに驚き、やつと携帯電話を使いこなせるようになったのに、もう携帯電話は使えなくなりますよ。この歳でスマホか。さあーどうしたのか。私の「一大事件」です。時代に乗り遅れないように心がけてはいますが、「戸惑い」しかありません。大阪の上の孫に負けないように、日々成長しようと思っ今日この頃です。

## 「いいかげん」と「良い加減」

香 霜 小太郎

老年になって身体がかなりくたびれてきた。夜間に十分睡眠をとれば翌朝はさわやかに目覚めるものと思っていたが、このごろは逆に疲れを感じるようになった。これも老境に入ったしるしなのかやむをえないことだろう。

若年から中年のころは比較的きちょうめんな性格で、物事をきちんと処理するのが好きなタイプだった。家庭でも部屋が散らかったりしていると気持ちが落ち着かず、ていねいに掃除することもあった。

さて老境の現在、自分の立居ふるまいが昔とくらべてかなり「いいかげん」になってきているのを感じている。そうしないとすぐ疲れてしかもその疲れがなかなかとれないようになってきたからだ。部屋の掃除や整理などもあまりやらずやっても大ざっぱになってきて、それを苦にする時もあるが逆にもう年だから仕方がないかと思ったりもする。

最近、これについて頭の中でひらめいたことがある。

老年になっても今まで一応「きちょうめん」を基本にして、それが現実には「いいかげん」な生活になってがっかりしていた。それを百八十度発想転換して「年寄りはいいかげんに生きる」ことを基本にしようということだ。日常生活を「いいかげん」を原則にして過せば疲れはずっと少なくなるし気分的にも楽になるにちがいない。部屋に多少ほこりがたまっても散らかっていても、人の生死にかかわりないと思えばよい。そして残った体力気力があれば、趣味のこととか人との会話とか楽しいことに振り向ければよいのだ。

ただ、百パーセント「いいかげん」な生活だと危険なことがいくつもある。例えば火の用心、戸締り、安全通行、それと金銭管理などだ。これらについては「いいかげん」に対応するととり返しのつかないことになるのできちんと対処しなければならぬ。つまり「いいかげん」ではなく「良い加減」が必要なのだ。老人にとつては、日常生活は「いいかげん」で過しなから肝心なところは「良い加減」で締めてゆくのがよいと考えているがどうだろうか。ただ、この「いいかげん」というのはやや暗くマイナスのイメージがあるの

で、例えば「ずばら」などの明るい言葉に置きかえた方がよいのかもしれない。

ところで、この考え方をほくよりもさらに高齢のご老体に話したところ、一言の下に「それはダメだ」といわれてしまった。その先輩は奥様を亡くされた後一人住まいで、毎日二十四時間いつもどこか緊張してすっかりと生活することを心がけているそうだ。老人といつても女房と二人のぼくにはまだまだ甘えがあるのだと感じ入った次第である。

## やさ丸

加藤 寿子

「ささ、ささ丸、ささ、ささ丸」今年の六月の夕方、外から何度も呼ぶ声が聞こえた。外へ出るとささ丸を捜して先日訪ねて来られた女のふたりが、とら猫を追いかけていた。「ささ丸はカメラ目線なんです、撮ってみれば分かります」もうひとりの友達の女のは、「涙が出る」と目頭を押さえている。先日近所の人が、「ここに迷い猫のささ丸がいるみたいだ」と言

いながら、チラシを持ってきた。顔は白く、胴体は茶色の二歳くらいの猫の写真は確かに最近になってよく見かけるトラ猫に似ている。だからすぐに連絡したのだった。喧嘩売りのような猫で、絶えず大声をあげてにらみ合いをしている。いつも家の周りにいる、大きな雄のトラ猫の肩間に一円玉位の血の塊ができていた。心配したところだ。

「そのささ丸ちゃんは喧嘩っ早いですか？」と聞くと、「目の上を八針縫う大怪我をして、入院したんです」と答えられた。残念だが、スマホに写った顔はささ丸ではなかった。険しい表情で、毛が逆立っていた。

公園でボランティアさんが飼っている地域猫の中で一番人懐こく、若くて歯もきれいなささ丸を、半年前に貰い受けたそうだ。しかし、車に乗せて出かけた時、駐車場でドアを開けた途端逃げられたという。猛スピードで走って行く猫は呼んでも振り返りもしないだろう。まさか交通事故に遭ってしまったら、そのボス猫と縄張り争いをして、大怪我をするのではないか、飼い主は途方に暮れる。

大勢いる猫の中、身をすり寄せてくる暖かい猫の愛らしさや、目が合い気持ちほぐれる時を思い出すと、

どうしても捜し出して、優しく保護してやりたいと思うだろう。

そのお宅には先住猫が一匹いるそうで、その猫との相性が悪かったのかも知れない、と私は思った。「仕方がないですから、子猫でも貰って育てるのはどうですかねえ」と私が言うと、「いいえ、ささ丸のことが今はどうしても忘れられないので、探偵さんにも頼んでもお金も払ってあるんです」と言われた。

それ程に思われているかわいささ丸のことが私も忘れられず、周囲をきよろきよろと見ながら歩いたり、自転車走らせていた。

二か月過ぎた頃、偶然に二回も道で飼い主の女の人と出会ったのだ。私は思わず、「ささ丸ちゃん、見つけましたか？」と尋ねた。ピラを見て、駅の近くでささ丸を見付けてくれた人がいて、すぐに捕獲器を設置したそうだ。しかし、野生化していて、呼んでも近寄って来なかった。その後やっと保護できた。しかし、ダニアレルギーで無残にも毛が抜け、入院させているそうだ。「まだ逢えないんです」と言われた。見付かって良かったというより、ため息をつくような気配が伝わった。「メイ、メイ、メイちゃん」家の飼い猫

を呼んでみた。知らん顔で、反応なしだ。しかし猫がそこにいるだけで、私はほっと安堵することができたのである。

## 平成が終つて……

(平成31年4月現在に於て)

小池 貴瓊子

平成の世となり早30年が終り、今や新しい年号の年を迎えんとしている。思えばあの日昭和63年1月7日に昭和天皇が天寿を全うされ崩御されてまもなく新元号『平成』が、時の小渕官房長官に依り、テレビで公表され、そして新しい一年が始まった。私にとつての『平成』は苦難の連続で、一日として心休まる日がなく終つた気がする。でも3年には3回の外泊旅行(国内の『上高地』『恐山』『佐渡ヶ島』)ができた事は当時元気で生存してくれた父母のお蔭である。(これが人生最後の外泊旅行となる。そして平成4年〜15年は、老親がおい／＼と体力衰え、病い／＼の連続でその都度の入退院の繰り返し、退院してからの在宅介

護と私なりに、それは大変な／＼時期であった。経済面は余裕のあった父は、もし子供がなかったら、有料の老人施設に入居できたが、父は残してゆく子や孫の為を思い、施設行きを断念して自宅と病院を10年に計10回も往復したのが、悲しい／＼父親の晩年であった。平成の半ば頃は、苦労はピークに達し、それこそ流行を追う余裕などなく、無論携帯電話どころか時代遅れの昭和のままの暮らしを余儀なくされて、老親のこと丈で一杯一杯の日々で、従って世間を広く見る目もなく、それが天から与えられた自分の宿命と悟り、できる限りの事はして来たつもりです。どんなに尽しても心から思っても97才の父は既に親の心を失いつゝあり、何一つ娘の心は理解してくれず、むしろそばにいる者程敵対意識が強く、たまに覗く第三者に愛着を持っているように見えて今思うとやはり認知症を患っていたせいかも？と思う。でも母親丈は私を最後の最期迄信じてくれて、「きぬ子がいなきや一日も生きてゆけない」と何度も／＼言ってくれたことが、せめての今は心の救いとなっている。どこの家庭も一つの屋根の下で暮らさないと分らないことがあり、第三者(世間)は真実は見えないので、唯外見丈見て善し悪しを判断

されて了うので、世間の人の前で自分を偉く立派に見える方が、評判は高くなり、私のように自分を卑下して引っ込んでる者は、目立たず世の中からはいつも／＼誤解の目で見られ、本当の私の事を知っているのは、亡き母以外ないことは、とつても悲しい事だ。人間は誰しも自分が一番可愛いに決まっている。自己弁護する訳ではないけれど、私は決して自分が悪人とは思わない。むしろ善良すぎて唯のバカの欲なしなのに、未知の人には狡くて頭が鋭くて仲々の悪者に見る人もあるみたいだ。でも私は世間の人から何と思われようと、何一つ悪いことはしていない自信がある。天に誓ってもそれ丈の悪企みを試みる丈の能力はゼロに等しいから、世の中の人(全てとはいわないけど)正しく人を見ることはできない。とすれば信じられるのは神仏以外ないことになる。いつも／＼私は自分に『知っているのは神様ばかり』『神様丈はご存知よ』と言いついて聞かして我慢して生きる。人はどんなに賢くても偉くても自分以外の者の真実の心を見ぬくことは無理なのかも？だから私は他人からどう見られようと、自分丈は自分を見捨てず、死ぬ日迄信じて生きてゆこうと思う。

# 藤

## 近藤 拓

源義経を祀る白旗神社の一隅に、毎年四月から五月にかけて、見事に藤が咲く。そして傍らに、芭蕉の句碑がある。江戸の俳人が建てたもので、その句は

草臥亭宿かる此や藤の花

とある。この句は藤沢で詠まれたものではないが、藤沢にひっかけて選んだのであろう。歌碑はないが、石川啄木と親交のあった近代の歌人土岐善麿に

きてみれば遊行の寺のふじなみは

むらさき散りて白ぞ垂りたる

というのがあつた。なんでこんなことを書いたかというところ、藤沢という地名は藤が沢山咲いている所から来ているという説があるからだ。

藤という植物は日本固有のもので、古くから親しまれて来た。万葉集にも二十七首採られており、この時代すでに庭で栽培されていたそうである。藤には、房の短かい山フジと房の長い栽培種のノダフジがあり、

後者が主に藤棚用となる。このノダというの、大阪府にある野田の地名で、その藤は素晴らしいので、足利義詮や豊臣秀吉が愛でたことによるといわれている。

植物に疎いので藤の名所というと、小田原城の「御感の藤」ぐらいしか思い浮かばない。藤の茎などを使って作った藤椅子とか藤寝椅子といった家具があり、夏に愛用される藤は春の季語であるが、こちらは夏の季語となっている。

「藤」と「藤」というと、藤原氏の略称となる。あるいは藤原氏の流れであることを示すという「源平藤橘」の藤氏・佐藤・近藤などである。筆者のところは、祖父から聞かされた話では、平将門を討ち取った豪勇「俵藤太」こと藤原秀郷流の「近藤」なそうだ。家紋は（かたばみ紋）である。この紋はその形がシンプルでしかも優美なため、桐紋に次いで広く愛用されているそう。四国の長曾我部氏が用いたのが最も古く、江戸時代には大名・旗本それに公家など一六〇余家が用いていたという。祖父は仙台の生れだが、その父親は熊本細川家の家臣で、明治維新で軍人として赴任して来て、仙台で一家を構えたとのこと。

筆者は御先祖には申し訳ないが、家系図や事蹟に全く関心がない。あつたとしても、祖父や父の代までである。「氏より育ち」と思っているからだ。

話がそれてしまったが、藤沢の「市の花」は藤で、B4判の公用封筒に市民憲章と一緒に印刷されている。市内の小中高校の校歌を全部調べて見たが「藤」が出て来るのは予想に反して数えるほどだった。「フジ」はふじでも「富士」が圧倒的に多かった。近年、引地川親水公園を始めとする「ふじロード」作りが行われているので多くの藤の花に期待したい。

## 父 母

榎 原 百合子

夜 電話がなつた。母と姉が交通事故に遭遇し、救急病院に運ばれたという。

父は、声がふるえていた。急いで仕度をして、父は、東京の救急病院に出かけていった。私は祖母と二人、家で留守番だ。真夜中、父は母と姉の事を知らせてき

た。

母は、三ヶ月間、全身を動かさずの絶対安静、姉は全身打撲の一ヶ月半の安静、との事だ。

日本橋三越前、山本のり店で何ヶ所かに送り、目の前の三越にいく為、信号待ちをしていた。そこへ、赤信号なのに、交差点に進入、次の瞬間、母と姉めがけて、猛スピードで小型トラックが突っ込んだ。

目撃者の証言で、母と姉は二、三〇メートル空を飛んだそうだ。

そして、姉は「ママ死なないで」をくりかえし、動かなかつた。

母は、頭から、大量の血が道路に流れでて周囲の人の涙をさそつたらしい。

父は、状況を説明するのに、とぎれ、とぎれの泣き声であった。

うろたえた父の声は、電話を越して、私に伝達し、私も声が「ガタガタ」とふるえて、何を話しているのかわからない。

頭が混乱してしまい、元気で、母と姉を見送つたその姿が、もしかしたら、再びみられないかもと思うと、全身ふるえがとまらず、目からは涙がこぼれおちた。

父によると、母は、頭を強打しているので、脳波の異常をきたす事が危険なので、絶対安静で、出来るだけ、の事をするからと、医者に言われ、神に祈るのみであるとの事だった。姉は、全身打撲で、ふくれあがり、顔はあんぱんのようにふくれていたとの事だった。

母と姉に「会いにこないでいいから」と、父は言った。

父は病院にとまりこんだ。精一杯、ひとときも、母のそばを、はなれなくなかったのだろう。

トラックの運転手は十八才と十七才のアルバイトの男の子だった。父は、再び「病院にくるな」といったそうだ。そんな、過去をもつ母と姉、十年前、百才で生涯現役で帰天した。姉は七十六才、元氣だ。見守った父は、四年前、百三才で帰天した。生涯現役だった。父と母、私は、あの事故の折、一心不乱で、もしかしたら、回復不可能だったかもしれない事故に、心をそそいで祈りを注いでいた父の姿に、奇跡と呼んだのは、父の愛と思っている。そして、父と母の美しい人生を、みつめてきた私は、七十才を越えた。

これから、主人と共に、父と母の美しい愛までとは言えないが、助け合って、生きていきたいものだと思います。

う。敬老の日に墓参りにいけなかったのが、十月初め、墓参りにいった。まんじゅしゃげの赤い花が、あちこちに咲いていた。

## プロ野球が好きだった頃

佐藤 壽

中学二、三年生だった昭和二四、五年頃、私はプロ野球が好きだった。テレビも民間放送もなく、ナイターもなかったから、実況放送は、日曜日の午後NHKのラジオを聞くくらいだった。毎月、「野球少年」という雑誌を買っていて、NHKのアナウンサー志村正順の「紙上放送」を愛読していた。これと思う試合の経過を実況中継そのままに文章としたもので、何度も読み返していた。その志村アナウンサーの住んでいた家が片瀬にあり、今も志村正順という表札が掛っている。

当時、高田馬場から西武新宿線で一駅の下落合駅の近くに住んでいたので、偶に後樂園球場に行った。中に入るのではなく、ただ回りをウロウロしていること

もあつた。私一人だけではなく、同じような少年達が何人もいた。七回位になって、外野席の切符切りの人がいなくなることもあり、そのウロウロ仲間情報に情報が伝わって、外野席にもぐり込んで観戦したこともあつた。球場で、選手の出て来るのを待っていてサインを貰つたり、サイン会で貰つたりもしたものだつた。

後楽園で試合が終わり、大映スターズの飯島滋弥選手が出て来たので、あとをつけて行き、水道橋の駅で階段を上り、同じ電車に乗ってサインを貰つたことがある。その時に、飯島さんの優しかったことは忘れられない。

昭和二五年、プロ野球は二リーグに分裂した。読売巨人のセントラルリーグに対して、毎日が中心になつたパシフィックリーグが出来た。私が好きだつた阪神タイガースから、若林忠志監督をはじめ、別当薫、土井垣武、呉昌征、三宅宅三等の中心選手が毎日オリオンズに移つた。少年オリオンズの会ができて私はその会員になつた。灰田勝彦主演の「野球小僧」という映画に、オリオンズの選手達が出演していたので、少年オリオンズ会員の為の試写会が丸の内の映画館であつた。終演後、若林や土井垣、呉のサイン会があつた。

私の机の引き出しの奥に、小さな古いスケッチブックがある。プロ野球の選手にサインを貰つた紙を、貼り付けたものだ。その最初に、巨人の選手達のサインがある。

新宿の百貨店の屋上でサイン会があつた。巨人を好きではなかつたし、平日だったのに学校をサボり、このスケッチブックを、その為に買って行つた。三原監督、川上哲治、別所毅彦、青田昇にサインを貰つた。別所は南海から、青田は阪急から移つて来ていたし、三原は、この後、西鉄に出て行つた。

このスケッチブックに、ちゃんとサインのあるのは、この四人のものだけだ。あとは、先に述べたように、サインを貰つた紙を貼り付けたものだ。

サイン帳には、このほか、松竹ロビンスの小鶴誠、真田重男、東急の天下弘、白木義一郎、黒尾重明などのサインがあり、志村アナウンサーのものもある。

## 六道湖日記

澁谷 恵子

大橋館の最上階の部屋からは、左眼下に大橋川が、目の先には六道湖が広がっています。朝六時過ぎ、蜆を取りに川から湖に出て行く何隻もの船のエンジン音でここ数日目が覚めました。

主人と泊まっている宿はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が昔、初めて松江に来た時に泊まり印象を記している縁の場所だそうです。そこで書き留めようとしています。

今日はもう四日目で、帰路に着かなければいけないのですが。始めの二日間は雨に降られて昨日よりようやく旅らしい気分になりました。

到着当日は、新幹線と伯備線の特急を乗り継ぎ八時間もかけて疲れましたが、旅のわくわく感がありました。

二日目は、朝から雨模様でしたが、早起きして出雲大社に出かけました。今月は出雲の国は神在月になり、新暦11月6日頃に神様が全国から稲佐の浜に集まるそ

うです。とても荘厳な感じがありました。

その後、観光園フォーゲルパークに寄り、出雲蕎麦を食して松江に戻りました。午後は松江歴史館に出かけました。主人の曾祖父の家系にまつわる特別展示がされています。遠縁の生涯を知る事が出来て感激しました。

曾祖父は、明治5年に東京に移られたようですが、調査のため学芸員の方は、東京谷中の墓参りをされたとのことで感激しました。はるばる山陰まで訪ねた甲斐がありました。

ようやく三日目に快晴になりました。六時起きで朝食をとり、電車で松江から安来に向かい、そこから無料バスで足立美術館に着きました。横山大観の秋の特別展があり、紅葉の絵が鑑賞できることを楽しみにしていました。平日にも拘らず観光バスの多さに驚きました。借景も取り入れ広い日本庭園は、素晴らしいです。手入れは大変なようです。その中で大観の日本画や紅葉に三度も見惚れていました。美しい庭園を眺めながら昼食をとりました。その後、松江城に向かいます。

国宝松江城は、出城を備える三層造りの姿の美しい

お城です。全国に現存する有数の天守閣の一つで、宍道湖や大山を眺望できます。

夕方からは、船から宍道湖の夕陽を楽しみました。夕陽が傾き始めてから沈んだ後までの八雲立つ色変わりを眺めました。湘南の海岸の夕陽と異なる美しさの夕陽でした。

今回の島根県宍道湖の旅は、ご先祖様のルーツを探る思い出深い旅となりました。

## 人生はルービツク・キューブ

高橋章夫

一時期、ルービツク・キューブというものにとっても興味があつた。

立方体は六つの面で構成されていて、それぞれ九つに分かれたパーツで組み合わさっている。両手で押さえながら、一段か二段を水平か、あるいは垂直に回転させるのだ。同じ色に揃えた光景がとても印象的で、わたしもやってみたくなつた。とりあえずひとつの面は同じ色に揃える事ができた。たったそれだけでも嬉し

くなつただけけど、それ以上揃えてみたいと思つた。そんなとき、わたしにとって衝撃的な事件が起こつた。同じ団地に住んでいて、わたしの部屋のさらに上の階にすんでいる、いくつか年上の男の子がいて、よく遊んだり、話しをしたりしたものだつた。その年上のセルファイが、なんと六面体の全ての面を、同じ色でそろえたのだ。わたしは、頑張つても二面揃えるのが精一杯だつた。時折三面揃うこともあつたけれど、なんとしても六面全部を揃えたい。

一体いつになつたら、六面全て揃うのだろうか。この頃から「不安」というもの静かで、わたしの近くに佇んでいる友人と人生を歩んできてしまつた。

：自分のチカラでは、六つの面と同じ色に変えられなかつたが、六色の色が耀く、手の平の上の小宇宙はとても魅力的だつたのだ。インターネットを自在にごく普通のセルファイが操れる時代ではなかつたので、時代を遡つて記憶を辿ることもできなかつたが、白く耀く面、黄色く耀く面、赤に耀く面、緑に耀く面、青に耀く面、橙色に耀いている面がそれぞれ結合する世界、下地をなす漆黒の闇のような質感の手触り。ひとつひとつの断片に触れる度に、果てしない世界があるのだと、わた

しにそつと教えてくれたのだ。

たった一枚のシールがその漆黒の上に貼られているだけなのに、表面の手触りの滑らかさ、何ともいえない光沢感。瓶のふたを回すように下の瓶を押さえて、上のふたを回して、緩めるような感覚。すると瓶とふたの間に隙間ができていく、あの感覚。その反対に、力をこめてもなかなか開かない時の、もどかしさと、手元が濡れて滑るときのちよつと異なるもどかしさを感じている自分はどうか見られているか、ちよつと不安になる感じ。でも矢張り全ての面を同色で統一してきたら、どんなに達成感が得られるだろうかと、いまでも頭を過るのである。一度きりの人生だし、後悔のないようにと思うのだが、上手くいかないのも人生なのだろう。

## 引地川親水公園早朝散歩

竹 下 静 江

早朝四時起床、近くにある引地川親水公園へ早朝散歩に夫と二人で行きます。九月に入りまだ暑く汗をか

きながら歩きます。十月に入り暑さも和らぎひんやりと散歩には良い季節です。でも、早朝四時は真つ暗、まわりが暗いので星が一段とかがやいて見えます。歩き始めて十年以上になり、当初は愛犬を連れての散歩でした。去年の夏ワンちゃんが亡くなり散歩はやめようかと思いましたが健康のために続ける事に……

一万歩を目標に少し遠回りをし、畑のそばを通り公園の端から端まで歩くと約一万歩になります。親水公園は引地川を挟んで両側が公園と散歩道になっています。早朝でもワンちゃんを連れられた人、歩いてる人、走ってる人が居ます。朝の挨拶をしモクモクと歩きます。公園には季節の木々、花々があり、春には桜が満開になつて見事です。桜並木を歩くのが大好きです。後は木蓮、紫陽花、つつじ、山モモ、桑の実、今年は山モモ酒と桑の実をジャムにしました。くるみの木が一本ありますが実を付けるはずが今年の台風で実が落ちてしまひ残念です。「♪このー木、なんの木、気になる木♪」が沢山あります。六月〜八月頃淡いピンク色で孔雀の羽を広げた様な花が咲きます。背の高い木でとどきません。花持ちが良く長く咲いています。ネムノ木だそうです。私の好きな木です。今の時期、花も

木の実も終り何も無い時ですが公園を歩いているとは  
のかな香りがしてきます。「今、咲いている花は私だ  
けなのヨー」とばかりにいい香りを漂わせているのは  
「キンモクセイ」、秋を感じさせるオレンジ色の小さ  
な花が沢山咲きます。花言葉は「謙虚」、香りのイン  
パクトにくらべて花が小さく地味だからだそうです。  
甘く強い芳香で芳香剤や香水に使われます。散歩道の  
中間あたりに小高い丘があり登ると富士山が良く見え  
ます。今の時期は曇や、かすみがかかり、あまり見え  
ません。これから冬の晴れた日は雪の富士山がとて  
きれいです。

散歩し始めた頃からくらくらすると猫の数が増えていま  
す。一、二匹しか居なかったのに。今は十五、六匹以  
上います。公園に連れてくればなんとかしてくれろと  
思い捨てて行くのでしょうか？市役所に言えば殺処分  
されるでしょう!! どうしたものか悩みです。餌をく  
れる人はわかるみたいで「ミーちゃん」と呼ぶとどこ  
からともなく集まってきました。「ミーちゃんうちの子  
になるー?」と声を掛けると、お腹が空いて餌が欲し  
くて来るだけで仲良くなれません。猫同士はみんな仲  
良し、今の自分達の境遇がわかってるんでしょうかね?

可哀相と言うより遅いです。今は猫の餌やりも兼ね  
ての散歩です。引地川にはカモやコイ、木々が多く野  
鳥、ハト、スズメ、カラス、色々居て目の保養になり  
ます。一時間三十分程の散歩で知り合った人達と休憩  
所で他愛のない話をし、みんなの元気な顔を見るとホ  
ツとします。本当にみんないい人達です。

「夫八十才」「私七十六才」今日も一日頑張りまし  
ようと声を掛けあい今日の一日が始まります。藤沢の  
地に来て三十年こんないい所があり、いい人達と知り  
合い、私たちが元気でいられるまで早朝散歩をつづけ  
たいと思います。

## 光と緑とあの方達に

土 屋 けい子

私は石川地区に居を構え、早四十年になります。あ  
の当時はバスは現消防署前を大庭小の方へ左折し、二  
番構方面は足が有りませんでした。狸が出たり自然が  
いっぱい、休日は昼食持参で、近くの公園や原っぱ  
で子ども達と良く遊んだものです。

その間に城址公園、親水公園が整備され、退職した私は折を見て親水公園を歩く様になりました。色々な時間帯を歩いて来ましたが最近朝五時から一時間の歩きが気に入っています。

川沿いに植えられている辛夷・満作・木蓮・梅・桜・藤・秋には秋桜・薄等に、季節の移りを感じ、目も心も生き生きしてきます。

真夏の陽ざしは苦手ですが、初秋からの東の空のえも言われぬ彩の変化。五時では未だ東の空は暗く、薄ねずみ色。それが刻一刻と明るさを増し、薄ピンク、徐々に橙色が加わり、色々な形の雲がそこに浮かぶという光景が楽しめます。月の満ち欠けによつては、西の空高く、白くなった月も見られ、今日も一日が始まるとの想いと、自然の美しさに心奪われ、無垢な自分も感じられ、大好きな時間となっています。

そして遥かに望む丹沢大山。富士の山。芝生の築山から眺める富士山は、形が綺麗で夕焼に映えたシルエツトは、朝とは又違った美しさです。

自然の美しさ以上に私の心を捉えているものに、毎朝の出会いがあります。互いに歩きが生活に根ざしているからでしょう。何時も大体同じ場所と同じ方に出

会います。黙々と歩き目礼だけの方。「おはよう」と言葉を交わす方。ハイタッチをして互いの手の温もりを確かめ合う方。愛犬連れの方。今迄の生き方が歩く姿勢や表情に表われ、素敵!!と思わせてくれる方等、色々な方と出会います。

名前も住んでいる所も何も知らない。共通点は親水公園が好きで、各々目標を持って毎朝歩いていると言う事。お会いできない日は「どうしたんだろう、具合が悪いのかしら？」と気になります。でも再びお見かけすると、取り越し苦労だったと、安心します。

昨今、人との関わり合いが希薄と言われ、基本的なお付き合いも苦だと言う人が増えていと聞きます。

朝の出会いには、名前を始め、その方の事を殆ど知らない関わり合いです。しかも、すれ違うわずかの時間。でも、今日も変わらぬその姿を確認し、元氣や勇氣や温もりを感じ合う事は、決して希薄な人間関係ではないと感じています。

心のひだがちよつと深くなる…その様な関わり合いが毎日持てる事、幸せです。

朝五時、暗いけど行つて来ます！

「光と緑とあの方達に」会いに…

## 中国東北地方慰霊巡拝の旅

富安 千鶴子

令和元年九月、中国東北地方友好訪中団の厚生労働省主催の慰霊巡拝の旅に参加した。

九月九日より十五日迄八泊九日の旅である。巡拝予定地は、ハルビン、ジェムス、ホーセイ、牡丹江、延吉、吉林、瀋陽、撫順である。参加者十名。ほとんどが、満州開拓団の元団員であり、一人は残留孤児として育った人である。私一名は父の弟の叔父が、学徒動員で満州国吉林で、死去とされていたが、今回、ソ連軍の戦車に肉弾作戦の一員になったという資料がでてきた。しかし、シベリヤに送られた可能性も残っているが。

今回満州開拓村での方々の、国と戦争に翻弄され、棄民ともいふべき壮絶なる体験を聞き、本の中での知識しかなかった私は落涙のみであった。日本の国策で、当時の世界不況下に軍部主導での満州帝国が、五族協和、王道楽土、新満州人民三千万、建設構想が現実、昭和七年三月成立した。そして、昭和二十年八月消滅

した。そして、大日本帝国の終りであった。満州にわたった人は、現実には、軍が、中国人所有の土地を安く買いたたいたり、強奪した土地であったとの事だった。

戸籍はいかがでしたか？との疑問に日本のまゝだった様であるがそのへんははつきりとしなないという。敗戦、在留日本人百万、満州引き揚げは、日本政府に見すてられ、関東軍に見すてられ、中国現地人蜂起、ソ連軍侵攻、ソ連兵拉致、暴行、耐乏生活の果、チフス、餓死、自裁、残留孤児、涙しかない。

島国である日本の無知、そのまゝであると思つた。何故に戦争が起こつたのか、そして、敗戦となつて日本は何をしたか。連合軍によつて軍事裁判がおこなわれ、東条英機首相を含め七人処刑A級とし、BCDと下々の多くの者を処刑した。すべての総括は終つてしまった。私は旅の間、戦争を伝える為に、又慰霊を伝える為に真実の近現代史を多くの人に学んでほしいと思つた。

戦争は、どの国も、国家の犯罪である事を知るべきと思つたのである。国民を権力のある指導者が、食料を与えず、武器も最初はあるが、最後は肉弾で戦車に飛んでいけとはよく言えたものだと思つた。餓死が

どんなものか、何とまあ、哀れな事であろうか。

兵士は屍しかばねの山の一部分となつていく。

先の大戦の事実を直視し、傀儡かいらい国家満州国をつくり、他国の領土を侵略した加害責任を考えなければいけない。そして、権力と残虐は一致してしまうのだ。言論は弾圧され去勢され、次第に能力は不能となり、つき従ってしまうのだ。抵抗が出来なくなつていく。

この七十四年間、日本は戦争をしないできた。近現代史を直視して、広島、長崎の被爆地を忘れず、沖縄も本土の被災も忘れずに、伝え、ひろめていく事が私の使命と思う旅であつた。澤地久枝氏著、十四才（満州開拓村からの帰還）で、自ら十四才での体験を語り、伝える為に回顧している。

さくらちゃん

## 第8話「ぶくし」

中 田 勇

（湘南絵本づくりの会）

夏休みの自由研究で、さくらちゃんは福祉について

調べることにしました。

「福祉って、お年寄りや体の不自由な人をいたわることかな？」

さくらちゃんはそう思いました。

さくらちゃんの家の中には、空き地があつて、その向こうに、体の不自由な人の作業所があります。さくらちゃんは空き地を通り、作業所に近づいて、中の様子をそっと覗いてみました。さくらちゃんよりもっと大きい子どもたちが、静かに何か仕事をしていました。

家にもどるとき、地主さんとクリーニング屋のおじさんが話しをしていました。

「車の事故を起こしちゃつて、もう車もクリーニング屋もやめました」

「それは大変でしたね」

「それで、地主さんにお願ひがあるんですが、空き地をちよつと貸してもらえませんか？畑をやつてみたいんです」

「怪我が治つてからして下さいね。畑は初めてでは難しいですよ。でもどうぞやってみてください。空いて

ますから。道具もいろいろあるので使ってください」  
おじさんはお礼を言つて、こつちに歩いてきました。  
「やあ、さくらちゃん。今度ここで畑をすることに  
なつたよ。さくらちゃんもたまには手伝いに来てね」  
「うん、行く、行く」

おじさんは、一生懸命に畑を耕していききました。と  
きどぎ、さくらちゃんもお手伝いしました。

ある日、作業所の子どもたちが先生と一緒に出てき  
て、畑の周りを囲みました。そして、珍しそうに畑仕  
事を見ています。おじさんは言いました。

「もし先生がいいとおっしゃるなら、みなさんも畑仕  
事をやってみませんか？」

そして、次の日から作業所の子どもたちが、先生と  
一緒に、畑仕事を手伝い始めました。とても楽しそう  
です。

「おじさん、みんな、今まで声も出さなかつた子が、  
元気にあいさつしたり、笑うようになりましたよ」

「それは驚いた。良かったね、先生」

さくらちゃんはこのことを自由研究に書こうと思いま  
した。

## わが青春の西部劇

新田 自然

(文芸光風)

アメリカ映画から西部劇が消えてしまつてずいぶん  
になる。ハリウッドをここまでに繁栄させたといわれ  
る西部劇がなぜ姿を消してしまつたのか。

戦後間もなくのころ、アメリカ映画がよく上映され、  
映画少年は夢中になつて映画館へ足を運んだ。日本映  
画を見るより、アメリカ映画の方が、異文化の香りが  
して、色彩も豊かで、とくに西部劇は簡単明瞭、乗馬  
シーン、ガンファイトなどがあつて、勧善懲悪のスト  
ーリーが分かりやすかつたのだろう。

最初に見た西部劇の作品は何だつたか、ジョン・フ  
ォード監督の映画が一番印象に残つている。まず騎兵  
隊三部作で、「アパッチ砦」「黄色いリボン」「リオ  
グランデの砦」、それに有名な「駅馬車」「荒野の決  
闘」など、一部を除いてほとんどがジョン・ウエイン

主演で、まあ似たような展開は、その後何度となく放映されたこともあって、ストーリーはすべて記憶している。また、随所に出てくる映画音楽も懐かしい。

好きな作品としては、ほかに「シエーン」「真昼の決闘」「大いなる西部」「荒野の七人」「リオブラボ―」などなど、挙げればきりが無い。

西部劇の時代背景の変遷について考えてみる。一八六五年まで続いた南北戦争の後、カリフォルニアで金鉱が発見され、それまでの東部だけの社会から西部に目が向き、西部開拓がはじまる。怒濤のように幌馬車隊が押し寄せ、先住民族（インディアン）や外国との戦いを経てアメリカの領土は拡大する。やがて鉄道が引かれ、西部諸州の独立が始まり、西部はもはやフロンティア地域ではなくなる。軍隊が開拓民を保護するという役割が消え、ガンマンも住み難い社会へ変質する。凶悪だったインディアンも哀れな被圧迫民族となつてゆく。西部劇を見る時、そのような一連の西部社会の変化のどの時代を描いたものか、それが大事だと思ふのである。

アメリカの社会環境も大きく変化し複雑化していった。第二次世界大戦から朝鮮戦争、冷戦時代を経て、

トナム戦争になり、観客の価値観も目まぐるしく変化して行く。西部劇時代の簡単な図式では理解も共感も得られなくなつていったと思われる。

西部劇、この一代を画したジャンルがハリウッドから姿を消したのは寂しい。ジョン・ウエイン型の俳優もいなくなつてしまった。大男でマツチョ、癖のある歩き方、頑固で無口、やや保守的で、ガン捌きがうまく、ラブシーンは苦手、こんな俳優は、もうこれからは絶対に現われないだろう。

ガンマンの時代は終わり、シエーンは独り馬に乗り、遠くに去つていった。

「シエーン、カムバック」

シエーンは振り向くこともなく去つてしまった。それは私の青春のようでもあった。

## 乙女の気持ちで

ネ コ ス ケ

「乙女の祈り」は、誰もが一度は耳にしたことのある曲だと思ひます。シニアからピアノを始めた私にとつて、

いつかは弾いてみたいと思っていた曲です。そんな憧れの曲を先生から弾いてみるようにと勧められたのは、ピアノを習って八年が過ぎた頃でした。

「乙女の祈り」の作曲者はポーランドのバダジエフスカという女性で、二十七歳の若さでこの世を去ったそうです。短い人生の中で作られた美しいメロディは、時を超えて今でも私達の心に響いています。彼女はどんな思いでこの曲を作ったのでしょうか、などと物思いにふけっている間もなく、練習はスタートしました。

楽譜の難易度は中級程度と示されていて、手を開いて弾くオクターブの連続、素早く何度も繰り返すトリル、さらには手の交差など様々なテクニクを要する曲です。

今まで、基礎練習のテキストを何年もかけて学習してきましたが、まさにその総まとめという感じでした。最も大変だったのは、七連符と十連符です。これがなかなか滑らかに弾けず、悪戦苦闘の日々が続きました。参考までにとネットの動画を見てみると小学生位の子供達が上手に弾いている姿もありました。人と比べはいけません、やはり落ち込むものです。

レッスンのたびに楽譜には赤ペンで先生の注意書き

がびっしりと加えられて行きます。それでも、「いつかは絶対、弾けるようになるから大丈夫」という言葉に励まされ続け、一年近くかけてどうにか完奏することができました。

歌や楽器を演奏することは、楽譜通りに歌ったり、奏でたりするのでは聴いている人の心に何も伝わって来ないと思います。ピアノはペダルで音を響かせ、強弱やブレス、テンポなどさまざまな表現方法で気持ちを伝えることのできる楽器です。

間違えないようにと常に緊張して音を出しているだけの私が、ピアノで気持ちを伝えられるようになるまでに、あと何年かかるか分かりません。

そこで私は「乙女の祈り」を自分が乙女の気持ちになつて弾いてみることを目標にしてみました。トリルだけでも可愛らしくしてみようと思うと、今までの緊張も少しずつ解け、曲に変化がついて来たようです。

どこまで乙女の気持ちになれるのかは分かりませんが、この曲を私の中で大切に育てて行きたいと思っています。

# はしけやし

畑 昌子

はしけやしたぬきの走る闇の闇 — 昌子

ポツン、ポツンと外灯も薄暗い。大通りより右にそれ、ゆるやかにカーブする。すると車のライトに何か動くもの「何！何！」・・・「猫じゃあないわね。」尻尾が太いから？タヌキ？「狸よ！」私も運転の娘も大声を上げる・・・急いで止る目の前を三つの黒い影。あゝたぬき！毎日ほぼ同じ時刻にこの道を通る、いつの間にか元気で生きているかと案じつつ。この日もゆつくりと走ると最初の一匹が止ってじつと見ている。「車に気をつけるんだヨ」と話しかけると、もう一匹、もう一匹が渡って消へた。生ゴミもビニール袋に入れた残飯等ない一体何を食べて生きているのだろうか。不思議な事に私が帰宅する時刻をわかっているようにその場所を横切る。その度に闇の中へ頑張れヨと言ってみる。狸で困っている方には申し訳ない。しかし生きようとして力を見せつけられて、こんな街中でスゴイナ！と想うつい先日台風で少しばかりの裏山の

木々が倒れ、木々をすける太陽がまぶしい。この明るさにつけ三匹の狸を想う心は変わらない。又今日も車のライトに現われるのだろうか、せつなくも悲しい日々である。

## 書くといいうこと 2

ヒラサワ タカシ

書くことは、面白いと思ってもうえたら本望だ。書くことは、そもそも難しい。

主題に沿って、あれこれ書ければ苦労はない。主題を与えられて、あれこれ取材して、一定の結論を得る。どうやって書こうか考える。これが、大きな流れだろう。

昔から、「文章には、起承転結があつて」と、言われる。漢詩を作成するときの基本だ。四つの展開がある。音楽の作成なども、これにのっとっていると云われる。

別な視点で見れば、室町時代に書かれた「風姿花伝」(世阿弥著)に示される、「序」「破」「急」の流れ。風姿花伝は、能楽を意識した指南書だ。踊りや芸事のおもしろい流れを構築してゆく際のバイブルだ。

「序」とは、話題のきっかけ、場の設定の説明とも言える。ここで注目を集めたいが、興味をひく展開ができればいいだろう。

「破」で、新しい展開を披露する。見せ場、山場ともいえる。

「急」で、結論として、何を述べたいか語る。伝えたい主題の謎が明かされる瞬間だ。

世にヒット作、名作は数々あれど、基本的には、この流れになると言える。

ましてや、人間は、知的好奇心旺盛な動物だ。「何

か、おもしろいことはないかな」と嘆きまわっている。人間の知的好奇心には際限がない。

生きている限り、「知見」(ちけん)を広げる努力をしたい。教養も深まる。

コミュニケーションは、おもしろい。いろいろなシチュエーションで、書くことが、求められている。自由に良作を書いてみよう。

## オリンピックとメダル

平野 茂樹

オリンピックや世界選手権などスポーツの国際大会では、金、銀、銅のメダルが一位から三位までの勝者に与えられており、頂点に立った選手は、ゴールドメダリスト、一位から三位の選手は総称し、メダリストと呼ばれ注目されている。

個別に英語で二位はシルバー(銀)賞、同じく三位はブロンズ(銅)賞と訳されている。

アルファベット圏の表音文字の国々では、高価な金属メダルの順でそれぞれの順位賞が与えられているだけである。

しかし、日本を含む、主に漢字表記の表意文字圏の国々、例えば中国、台湾、韓国などでは、金、銀、銅という貨幣の役割を持っていた金属の表現に対し、価値の観方に含蓄を持たせ表現させている。

銀という文字表記に対し、よく見ると、金偏に「良い」に近い文字を添えて銀と読ませており、銅も金偏に同を添えて銅と読ませている。

漢字（表意文字）は、単純に金属が本来持っている相対的な価値観だけで一位から三位までを現わしているのではない。

銀は二位賞ではあるが、金より良い面を持ち合わせている可能性がある、総合的な価値判断を促しており、一方、銅は三位賞ではあるが、金と同じ価値を持ち合わせている場合もあるのでは？ と問いかけているのである。単に一位、二位、三位と順位を表す賞ではないことを表意文字で表わしているのである。

スポーツの世界では、残酷にも結果の記録数値がすべてであり、現在は百分の一秒までも計測され、結果

を出し、順位を決めているのである。もちろんスポーツの世界では数値だけではない種目も多々あるが、出来る限り科学的な判定力で測定し、公正に結果を出せる仕組みが、日々取り入れられつつあり、順位決定の方法は進化し続けている。しかし、この表意文字が意味するところは、金、銀、銅という文字そのものに価値判断の意味を持たせているところが面白い。

世紀のスポーツの祭典を楽しむ観客やファンたちが、順位という結果だけに一喜一憂するのではなく、檜舞台に参加する選手たちの経歴や参加姿勢、出場までの努力と精進の足跡の情報にも視線を向け、興味を抱き参加選手の人間像まで含めた総合的な判定力を持つて観戦すれば、開催国民として、優等生になれるのではなからうか？

でも、このような見方でゴールドメダリストの存在価値が変わる訳ではない。

一位は一位であり、頂点に立った時点で、結果を出したことで、一番輝いており、いまが一番旬であることには変わりはない。

令和の御代を迎え、年が明ければオリンピックイヤーであるこの開催期間だけでも災害も起こらず政治か

ら少しだけ離れ、争いのない平和な期間であることを願っている。

## ミーちゃんの日常

藤本 眞砂子

私のベッドの足元で今夜もかわいい姿でぐっすり寝ているミーちゃんの話を見せてください。薄いピンクと白に近いグレーの毛が体の周りをリング状に巻きついた推定三歳のそれはそれは愛くるしくて賢いメス猫である。彼女の耳元にはいつも私の好きなシヨパンやシャンソンの音楽が流れている。私が昼間レコードをかけっぱなしにして寝ていると、いつの間にか隣の部屋から入ってきて枕元で可愛い姿を曝して一緒に寝ている。この子よつほど音楽が好きなんです。彼女は早朝に起きて二階のレースのカーテン越しから、通勤・通学をする人、それに朝の犬の散歩をする人達をじっと眺めている。

ミーちゃんの愛おしいところは、私がちよつと寝坊していると「ニヤーン、ニヤーン」と鳴いて起こしに

来るし、私が朝食のため階段を下りると、この子もわれ先に下りてくるので何度も足が絡み合って大怪我しそうな感じが幸い手すりがあるので大事には至らない。ミーちゃんはえさを食べ終わるやさつきと散歩に出かける。一時間ほどで帰ってきてからはどこへ行くにも私につきつきりになる。階段の上り下りは当たり前。近所の用事で出かけるときは、様子に気づくのか、すでに先回りして道路の手前で待っている。この子の一番の楽しみは、私が庭の手入れをしている間、木に登ったりして遊ぶことである。そうでもないときは、私の腰の周りをウロウロしたりして疲れるとペランダの椅子に座って私はどこにも行かないように監督している。また、ブラシで「気持ち良い良い」をしてあげると身をクネクネとゆすつて私の手をペロペロ舐め回す。

多分お札の意味なのだろう。外に出られるように二階の部屋の戸をほんの少し空けておくど地上から幹を伸ばした藤の木を伝って庭との間を自由に出入りできる。独りで出ていくときは外で何をしているのか心配だ。良い友達でもみつかると良いが……。

外出の準備をしていると、例によって雰囲気察してか玄関の外で待っている。私が一泊以上の旅行をす

る時は、ミーちゃんがどうしているのか心配で堪らず早々に帰宅するくらいなのだ。今日も午後三時頃、近所の家まで着いてきて途中でいなくなった。どこかに散歩していると思つたが夜になつても戻つてこない。

我が家に帰つてきて、外から入れるように二階の戸を少し開けておいて、部屋の電気をつけたまま十一時眠りにつく。明け方、二階の廊下と隣りの部屋が騒々しい。驚いて起きると、変わった鳴き声でミーちゃんを夕方いつも呼んでいるどこかのオス猫がいつの間にかベランダまで上がつて来てミーちゃんと窓越しに対面しているのだが、ミーちゃんは一向に関心がないのだ。

つい先日、そのオス猫に家まで追いかけられて家中逃げ回り、その運動会騒ぎに下で寝ている息子も起こされたくらいだった。オス猫は、その日はあきらめて消えていた。

何事もなかつたかのように、私の足元でねているミーちゃんを眺めていると、「この子も外で結構モテているんだ」と独り微笑んだ。

## 雲

堀井 寛

私は空をみるのが好きである。

朝、食後にベランダの椅子に腰かけていづくしながら空を見上げる。晴れわたつた空に真綿をちぎつて浮かべたような雲、もくもくと湧き上がったような雲、横長に流線形に伸びた雲、いろんな形の雲が刻一刻と形を変えながら流れ行くのをみるのは楽しい。

夕ぐれ時に江の島の島の西浜に座つて眺める沈みかける陽光に染まつた地平線上の雲も美しい。

深夜にこうこうと冴えた光を放つ月よりも、雲間に見え隠れしながらうつろいゆくほうが風情がある。

碧空に聳える富士山も威厳があるが中腹にサツと一筆なげたような雲がかかっているほうが富士山らしい。

雲の形は「くもり雲」「きり雲」「わた雲」「入道雲」「ひつじ雲」「おぼろ雲」「雨雲」「すじ雲」

「うろこ雲」「うす雲」（いずれも俗称）の十種類に

分類されている。

色も、純白の雲、雨模様のネズミ色、暴風雨をもた  
らす真つ黒な雲、朝焼けに映える金色（こんじき）色、  
夕暮れ時のピンク色と百花繚乱である。

雲は時として雨を降らして蛙を元気づけ、時として  
野原のうさぎに陰をあたえる優しさがあると思うと、  
恐ろしいまでの暴風雨を巻き起こす気まぐれものでも  
ある。

「雲がくれ」「雲や霞と逃げる」「雲をつかむような  
話」「雲に梯（かけはし）（たかのぞみ）」「雲助」  
など雲はいい意味に使われていないのはなぜだろう。

漁師は毎日夕暮れ時の雲の状態を見て翌朝の出航を  
決めている。

丘の上で  
としよりと  
こどもと  
うっとり雲を  
ながめている  
おうらい雲よ  
馬鹿にのんきそうじゃないか  
どこまでゆくんだ

ずっと磐城平の方までゆくんか

雲もまた 自分のように

すっかり途方にくれているのだ

あまりに ひろすぎる碧空で

（山村 暮鳥 作）

荒井由実の作詞・作曲で本人が唄っている「ひこう  
き雲」はメロディーがよく「空に憧れて空をかけてゆ  
くあの子の命はひこうき雲」の最後のフレーズは歌を  
際立たせている。

海辺で寝そべって風と共に自由気ままにたわむれな  
がら変幻自在に姿を変えてゆく雲・・・いつまで  
眺めていても飽きない。

雲は空というキャンバスにさまざまな絵模様を描き  
だしている気まぐれでたぐいまれな画家なのだ。

## 年は取っても健康で

松本 実知子

(つっせん)

近隣の町内会館で全八回の「公園フィットネス」なる講座を受けている。知り合いから誘われたのがきっかけだが、「公園」の文言に引っかけた。寒さが厳しい一月に公園で体操をやるのだろうか。

電話で、主催の地域包括支援センターの担当者に確かめると、

「暖かい日であれば公園ですが、会館の中で行うことが多いと思います」

との返事だった。

そういえば、他の会館の名前で「公園フィットネス」を行うというチラシを見たような気がする。ラジオ体操ではあるまいし外で体操は気が進まない。と忘れていたが、あれも実はどこかの会館の中だったのだろうか。

通うことになった会館であるが、想像より歩きではあり二十分余りかかった。まあ体操へ行くのだから、

その位は準備運動と割り切ろう。普段は外出のほとんどに車を利用し、目的地に着いてから散歩と称して、スーパ―やショッピングモールの周辺を歩く程度だ。良い機会と思わなくては。

少々歩き疲れて到着した会場は目立つピンク色で、目印になる。構成員は世話係の職員二名と、講師の早稲田大エルダリーヘルス研究所の招聘研究員だった。三十代の声の大きな元気良い女性だ。受講生は八名、皆七十前後だろう。

私自身は、八回の講義の中五回しか出席できなかったが、運動と健康長寿の関係を分かり易く勉強できた。おまけに面白かったのだから、とても有意義だった。

筋肉には種類があるという話ではマグロのように持続して動かす筋肉、ヒラメのように瞬間的に反応して動かす筋肉があると、習った。なるほどね。では転倒予防になる運動は何だったろう??というわけで、この講座を聞くだけでは意味がない。座学だけではなく、コグニサイズで頭と体を同時に働かせることも学んだ。コグニション（認知）エクササイズ（運動）とのことだ。

講座の終わりごろ、講師の方から後三回の継続を提

案された。その後はサークルを作つて運動を続ける流れになりそうだ。

お世話されるばかりの講座と違い、自主活動となると多少なりとも労力がある。それに帰りは、上り坂を二十分以上歩かなくてはならない。思案しながら、貰つた「認知症を運動で防ごう」という題の資料を見直そうと探したが見つからない。持つて帰つてから、どこに置いたのだろう。昨日から気にかかつていたが、先ほど置き場所を思い出し、ホツとした。私もサークルに入れてもらおう。

## 母のギョーザ

儘田 加寿子

夕食の仕度にとりかかり、ギョーザを作つた。野菜もフードプロセッサーできざみ、市販のギョーザの皮を使つて時間も長くかからずギョーザを作つた。ギョーザを作りながら母の作るギョーザを思い出している。戦後、中国大連から、家族6人で、引揚げてきた私

達家族は、やつと少し生活が落着いた頃と思う。

多分、父がギョーザを食べたいと言つたのではないかと推測する。

母が現地の人から、教えてもらったギョーザを作つた。粉をこねて、耳たぶの柔らかさにして、生地を作り、キャベツと玉ねぎを細かく、みじん切りにして豚ひき肉を入れ、大きなナベいっぱいに種を作つた。

ちゃぶ台の前にすわつて、母のギョーザ作りの手伝いをするのは弟と私であり、たくさんのギョーザを作つた。両親は、ギョーザのことを豚まんじゅうと呼んでいたが、いつのまにかギョーザと呼ぶようになった。ギョーザをゆでて、それにソースをかけて食べる。

母が考えた「たれ」である。

時は過ぎ、ギョーザ作りは我家のお正月恒例行事になり、兄嫁も加わり、にぎやかになった。あの頃が母のギョーザ作りの最盛期だつたと思う。

しかし、世の中においしいものが、あふれ出る頃になると、いつしか母のギョーザ作りも終わりをつけた。母が生存中に私が母に言つた。

「お母さん、もう一度、一緒にギョーザを作ろうよ」と。でも母は首をふつて「もう、おしまい」と作る意

思表示は、しなかつた。わいわいおしゃべりをしたり、笑ったりして、母がギョーザ作りの中心であった、あの光景を思い出すと、涙が出てくる。もう還えられない昭和の時代、貧しかったけど、ほのぼのとした生活が懐かしい。

## スーパーボランティア

森 眞彦

平成三十年八月十二日、山口県周防大島町で二歳の男児が行方不明になった。警察などが百四十人体制で捜索したが見つからなかった。行方不明から三日目、捜索ボランティアとしてやってきたのが、七十八歳になる尾嶋春夫さん。彼は過去の経験を生かし、捜索を始めてから、わずか三十分後に男児を発見し保護することに成功した。尾嶋さんはボランティア歴が約二十五年のベテランであり、行方不明になってから六十八時間後に奇跡的に二歳児を救出したことから「スーパーボランティア」と呼ばれている。

尾嶋さんは昭和十四年十月に大分県の国東半島で生

まれた。七人の子どものうち上から四番目であった。彼が小学五年の時に母が四十一歳で亡くなり、家が貧しかったために農家に奉公に出された。中学を卒業すると同時に、今度は魚屋さんの見習いになった。その後、別府、下関、神戸の魚屋を転々として修業し、二十九歳で待望の魚屋を開店した。懸命に商売に励み、店は繁盛したという。店を閉じたのは六十五歳の誕生日であった。五十年間働いて、六十五歳になったらやりたいことをしようと決めていた。商売で多くの人に世話になったこと、そして鮮魚を扱い、魚の命をいただいて商売を続けてきたことに対して、少しでも何らかの形で世間にお返ししたいと強く思っていた。

最初のボランティアは地元の由布岳の登山道整備であった。その後、約二十五年にわたってボランティア活動を続けてきた。東日本大震災の時は宮城県で、西日本豪雨の時は広島で支援活動を行っている。軽ワゴン車に食料や水、寝袋を積み込み、車中泊をしながらボランティア活動を続けている。現地では自前のボランティア道具を背負って現場に向かう。ボランティアに関しては「自己完結」と「自己責任」が原則で、対価も飲食物も一切受け取らないことにしている。収入

は年金だけで、食事は自炊を続けている。

新聞のスクラップが趣味で、生きていくうえで指針になりそうな言葉に出会うと、自宅の居間に貼り付けている。例えば「今日は二度と来ないが、明日の朝は必ず来る」「かけた情けは水に流せ。受けた恩は石に刻め」「実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」などなど。このような言葉を実践し、人間を磨いてきたのである。

尾畠さんは「何かあったら、これからも被災地へ手助けに行きたい。体が動かなくなつて、ボランティアが難しくなつたら、いつか定時制の夜間高校に通つて学びたい。夢はいつまでも持ち続けたい」と語っている。尾畠さんの生き様を知るとは、生き方に迷っている人たちにとって、地に足の着いた生き方のヒントになるのではないかと思われる。まさに、尾畠さんは、信念を貫くスーパーボランティアなのである。

## 夢実現への数々の

### 挑戦の機会に感謝

山崎 良彦

多くの人々は、自らの人生を振り返つてみた時、若き時に描いた大きな夢の実現の為に、数々の困難な挑戦の機会を乗り越えてきたからこそ、自分の夢は実現出来たと感無量になる時があるのではないのでしょうか。

私の場合は、将来は国際的な仕事をしてみたいという夢を持っていたことと、幸いにも藤沢市内のとある国際企業に入社出来、数々の困難な業務にも挑戦し、それは、まさに私に与えられた数々の困難な挑戦の機会のお陰によるもので、心から感謝しています。

私の入社後の仕事は、工場での技術的な仕事でしたが、英語については学生時代の英語力では全く歯が立たず、そこで、英語を基礎から学び直し、科学技術英語も必死に勉強しているうちに、会社の英文資料も次第に理解出来るようになっていきました。

その後、ある三月のことでした。会社から「四月か

「東京の本社へ転勤するように」との指示があり、私は本社へ転勤することとなりました。転勤の理由は、私が所属する事業部が国際販売業務を本格的に行う為に製品技術や英語が分かる若手社員を工場から採用する為とのことでした。しかし、更に驚いたことには、転勤後まもなく、今度は「五月から提携先米国企業の極東事務所へ出向する」との指示でした。私の人生があまりにも急展開したので、ただただ驚くと同時に、新たな業務に挑戦することとなりました。

ところで、この米国企業の極東事務所の仕事は、東南アジア各国に於ける同社の子会社や代理店への販売支援で、私はそのような困難な仕事の経験は全くありませんでしたが、意を決して、その仕事に挑戦することとしました。極東事務所の数人のメンバーは、私以外は全て欧米人で、日常業務も全て英語で行われており、私にとってはこの環境も新たな挑戦の機会となりました。

やがて二年半に亘る極東事務所での勤務も終了し、私も自社の国際部門へ復帰した時には、既に東南アジア各国に幅広い人脈を持ち、社内の他の国際部門とも密接な人間関係も出来上っていたので、大変理想的な

体制で新たな業務を推進することが出来ました。

しかし、その後、事業部長から「海外向け英字新聞を発行するように」と新たな指示があり、私は日常業務に加えて新聞記者さながらの活動を展開し、社内米人ジャーナリストによる英文チェックを受けながら、その英字新聞を世界のお客様に定期的に発行し、多くの方々から大変喜ばれました。それはまさに私に与えられた新たな挑戦の機会のお陰によるもので、心から感謝しています。

これからは、若い人々の夢の実現の為に、自らの経験を活かして、お役に立てる人生を歩んでいきたいと願っています。

## ラグビーワールドカップと日本人

山 下 一 馬

日本は、自国開催のラグビーワールドカップで盛り上がっている。日本チーム「Brave Blossom」は、予選ラウンドでアイルランド、スコットランドの強豪を破り、4戦全勝。1位通過で決勝ラウンドに挑み、惜し

くも南アフリカに敗れたが、史上初のベスト8となる。このチームは、31人中16人がラグビーの強豪国の出身、そのうち7人が日本国籍を取得している。ニュージーランド出身のトンブソン・ルークは、「生まれた国は関係ない。僕らには日本のプライドがある。」と述べている。トンガ出身のアナマキ・レレイ・マフィーは、「トンガ代表入りを辞退し日本代表入りしたとき『どちらを選ぶかすごく悩んだ。奥さんは日本人だし、大学時代から日本で生きていくつもりだったし、この国の生活が好きだった。だからジャパンを取った。』と語っている。このチームがここまで躍進できたのは、それぞれ出身国が違う異国文化を背負っても、日本を愛し、言葉を超えた次元で心一つにして、「阿吽の呼吸」でチームプレーが出来たことだと思う。ラグビーだけではなく、八村塁は、ベナン人の父親と日本人の母親の元、富山県で生まれ育ち、日本人として初めてNB Aプロバスケットボール、ワシントン・ウィザーズから一巡指名を受け、プロ契約後、華々しいデビュー戦を飾っている。またテニス界で大坂なおみは、ハイチ系アメリカ人の父と日本人の母を持ち、2018年全米オープン、2019年全豪オープンで優勝し、一時世界

ランキング1位となった。彼女は米国と日本の二重国籍から日本国籍を選択し、2020年東京オリンピックで日本代表選手として出場することを宣言した。八村塁も大坂なおみも従来日本人のイメージとは異なるが、より日本を愛し、日本的な心を持っている。こうしたことから、日本人とは何だろう、日本文化とは何だろうと考える。学生達に日本の文化について質問したら、返ってきた答えは、「おもてなし」「和食」といった表面的な反応で、何一つ心に響くものはなかった。ラグビーチーム、八村塁、大坂なおみは、異国の文化から日本で暮らし、日本の文化に触れて日本が好きになり、日の丸を背負って世界で活躍している。

我々日本人は日本に生まれ育ち、当たり前のように日本の良さを享受しているが、本当の日本文化の良さには気がついていないのではないかと。私は40年以上に渡ってアメリカの企業で働いて得た事は、日本人として異国の文化に触れ、海外の同僚と同じ立場で仕事し、彼らから日本の良さに気付かされた事だと思ふ。これから、益々海外からの人材を受け入れ、また日本の会社であっても外資系の経営になる世の中、より日本人としての自覚とプライドを持ち、異国文化を理解しつつ、日本

の文化を世界に広めることが必要だ。出身地は異なっても、姿が異なっても、日本を思う気持ちとを共有し、お互いに思いやりの心を持って、同じ日本人として頑張つてゆきたい。"One for all, all for one."

## 幼な子の世界に遊ぶ

山田 節子

幼な子の世界に遊ぶ毎日です。今回も高校同期会の近況報告欄に、こう書き加えた。

全身全霊をもつて接してくれる孫たちから顔をあわすたびに、若さを保つ魔法をもらっていると感じているからである。隣家に住む孫娘からは今夏、独楽まわしに挑戦という課題をもらった。その日は独楽の持ち方から始まつて、糸の巻き方、振り出す時の姿勢や、目線の定め方まで示してくれ、続けて成功するまで休憩なしの厳しさだった。あの時の達成感は格別だったけれど、首筋を捻るといふ辛いおまけつきでもあった。

雨の日には、私の苦手なトランプ（神経衰弱）を、私が降参と言うまで続けた。降参するまでの時間が短

くなるのが面白いのだそうだ。運動以上に疲れてしまふのだが、子育て時代にはなかった気持ちのゆとりが孫と遊ぶ喜びにつなげているのかも知れない。

私の宝物の中に、出版後七十余年を経た、素晴らしい世界へ※という赤い表紙の絵本がある。著者マンノ・リーフは、人類の禍である恐怖の源を根絶してこそ、地上に戦争という不幸をなくすことが出来るという信念に基づいてアメリカの子供向けに多くの本を著していた。第二次世界大戦直後そのひとつが日本でも翻訳出版された。翻訳権獲得の印や、日本出版配給株式会社などと、敗戦直後を明示する文字が残されている。

——私たちの祖先が暗いじめじめした洞穴に住んでいた頃は、みんな荒くれものでした——に始まり、——世界中の少年少女、私たち皆が考える人になろうではありませんか。平和なすばらしい世界を築きましょう——で終る七十八頁の絵本の中身は、人間として大切な心の持ち方を、優しい言葉で伝える表現の工夫や、彼の単純な挿画が子供たちがすぐに真似出来そうだからか、読み手をすぐに虜にってしまう力をもっている。紙は弱り、黄ばみ、端はセロテープなどない時代を感じさせる細い紙の補修で痛々しいものになっているが、お

そるおそる孫たちもページをめくっている。

この絵本が宝物である訳は、そここに私の父の筆蹟で、漢字のふりがなや、英語のいみが書き入れているところにある。今でもそこに父の声を感してしまふ。

※ Let's Do Better

印刷技術が進歩し、絵本もどんどん美しく魅力的になつてはいるが、一時代前のものと見較べた時、未来の子供たちへのメッセーヂが少ないような気がする。遊んでいる時、「おばあちゃまの育つたころは？」と、言い出すことがある。「今とちがつて、ほしいものを簡単に手に入れるのは難しい時代だった。でもね、少しでも良い社会にするために、丁寧に暮し、ひとつひとつ工夫する大人たちを見習って大きくなつたような気がするわ。夢をいっばいもつて、それをめざして、時間を大切に使う人になりたいわね」と言う私。  
「頷く幼な子の瞳も、喜びに變つていくのだ。」

## 魅力ある多摩大学のリレー講座

山 成 健 治

(文芸光風)

私は湘南台駅から徒歩数分の所に住んでおり、徒歩圏内に、多摩大学の湘南キャンパスがある。

このキャンパスでは、毎年「春学期」「秋学期」と称するリレー講座が開かれ、各学期とも一回八〇分の講座が十二回行われる。私は二年前からこの講座に参加しているが、今ではこの講義への参加が楽しみの一つとなつている。

というのも、この講座は①カリキュラム・講師陣が魅力的であること、②受講料がリーズナブルであること、③会場までの往復が、私にとっては適度なウォーキングにもなること、という三つのメリットを有しているからである。

先ず、①のカリキュラム・講師陣についてであるが、例えば、文科省の事務次官であった前川喜平氏の「安倍政権下の教育政策」、ヤマトホールディングスの社長であった山内雅喜氏の「クロネコヤマトの満足創造

経営と地域との連携」、NHK「クローズアップ現代」のキャスターを長く勤めた国谷裕子氏の「SDGsが私たちに問いかけるもの」など、ホットな講義を数多く聞くことが出来た。

次に受講料であるが、各学期とも六千円である。十二回受講して六千円という破格の価格が設定できるのは、多摩大学の学長であり一般財団法人・日本総合研究所会長である寺島実郎氏が、講師の人選・依頼等を行っているからであろう。また、湘南キャンパスでは講師の話を生で聞くのではなく、映像を通して聞くという「ライブビューイング方式」が採用されているところに、リーズナブル価格成立のもう一つの要因があるように思う。

因みに、寺島氏自身も、要所要所で必ず講義を行う。この講座が「寺島実郎監修リレー講座」と命名されているところにも、その辺りの事情を垣間見る思いがする。

ともあれ、豪華講師陣と時宜を得たテーマ設定によるこの講座に、破格の受講料で参加できることの魅力は大きい。

もう一つ、私は後期高齢者の仲間入りが近づいてい

たので、適度なウォーキングが必要と想っていたのだが、この講座に参加すれば自ずと自宅から数千歩のウォーキングが可能となるのである。

更に、自宅から多摩大学の湘南キャンパスを往復するには、引地川沿いを歩くコースもあり、このコースなら四季折々の花々を楽しむことも出来るのだ。つまり引地川を歩いて大学を往復するコースは、散歩のコースとしても魅力に溢れているのである。

引地川沿いに、四季の移ろいを味わいながら、多摩大学では脳トレに励む——リレー講座への参加は、私に至福のひとつを味わわせてくれている。

## 母は神様です

横 田 佳代子

田中作治先生は藤沢で講演された。「小学生の頃、日曜日はいつも長岡市の朝市まで往復40キロの道を、<sup>ちまき</sup>粽用の笹の葉やぜんまい、野菜を売りに行く母のリヤカーを押しました。母は良い商品を揃え、必ずおまけをつけ、量も多めにし、皆に親切で、お客様に信頼さ

れていました。私は母を尊敬し、母から商売の基本は誠実ということを学びました。母は神様です」

昭和14年生まれの田中先生は、中学を出ると集団就職で上野駅に着き、社会に一步を踏み出しました。勉強の好きな先生は働きながら夜学の高校を終え、日本大学の通信教育も卒業。日本経営大学校で企業経営を学び、産経新聞社主宰の東京経営大学院に2年間通った。

高校1年の時、小さな田中文具店に就職。店主田中米二氏は田中作治先生の忍耐力、誠実に努力する人間性を高く評価して養子に迎えました。26歳で社長に就任。養父の手堅い商法、信用、始末を重んじる問屋経営の基本哲学を生かし、現代的手法を軸とした事業を積極的に展開して、1985年、創立60周年には130億円企業、日本一の紙問屋に成長させました。

田中先生は会社を大きくし、収入や、売り上げを伸ばすことだけでなく、人生にとつて、他の人に役立つ、地域社会の発展に尽くすことが大切と、国際的な奉仕団体に入会し、職業とボランティアの両立した人生を歩み始めました。最初は町内の掃除を2人で始めました。輪が広がり、市の59団体が加わり、清掃活動が市

全体に広がりました。今でも田中先生は清掃を続けています。

2012年から2013年、田中作治先生は世界の約200ヶ国、120万人の会員の国際的な奉仕団体の世界の会長に就任しました。日本人として3人目です。会長年度を含め2年半、シカゴの本部近くに住みました。奥様の京子夫人と共に、世界の平和と発展のため、70ヶ国を訪問し、人々とふれあい、問題解決のために話し合い、最善を尽くしました。奉仕を通して平和という理念を実践してこられた田中先生ご夫妻は、多くの国の人々から歓迎されました。「水の問題ではアフリカに行きましたが、先進国の援助が必要で、私はプロジェクトとして木を沢山植えてきました。緑を増やす植樹は地球を守るための重要なプロジェクトです」と提言されている。

田中先生の活動を支え続けてこられた小沢一彦氏は「自分で稼がれたお金のほとんどを、世界中の困っている人々のために使ってきました」と、田中作治先生のこれまでの陰徳を讃えました。

その後、折に触れ、田中先生にご指導を頂く機会がありました。「朝起きて、夜寝るまで、駅を歩い

ても小さなことでよいから、良いこと、小さな親切を、毎日続けてます。それはとても美しい時間であり、一日です」「私は子供の頃、貧乏だからよかったです。おしんのヴィデオ買ってきて、観ているのですよ」

## 一話一句

吉田 邦 男

(文芸光風)

### 連風

春まだ浅い頃だつた。幼い娘と二人で風を揚げやうと小高い丘に登つて行き、支度を始めた。不慣れなわたしは、買つてきた連風を娘と手分けして地面に並べて、絡んだ糸をほぐさうとした。すると急に風が吹いてきて風が舞ひ上がった。連なつた風は八つに分かれ、一列になつてするすると上昇した。わたしたちは慌てて糸の末を探し糸巻きを掴んだ。どちらが先に掴んだか覚えがない。ただ、二人してうつくしく空に舞ひ上がった連風を感動とともに見上げたことだけは、今でも鮮明に覚えてゐる。

今、その小高い丘は藤沢イオンと云ふスーパーマー

ケットになつてゐる。そして、娘は成人して就職し、少し遅い結婚、出産をし、育休中だ。しかし、この春復職しやうとしたが、いくつか申し込んだ保育園にはずれ途方に暮れてゐる。

連風の糸ほどく間のもどかしく

初午

わたしが生まれた処は東京の下町で向島と云ふ町だ。江戸の名残りを留めてゐる一方で小さな工場が軒を連ねるきはめて貧しい町だ。

わが家の小さな庭に稲荷を祀つた祠があつた。毎年二月初めの午(うま)の日は祭日とし、稲荷講の行事がおこなはれる。ところが、わが家では二度目の午の日、二の午にそれをおこなつた。初午の日、父と母は浅草菊屋橋や亀戸天神近くに住む稲荷講の知人に呼ばれて出かけるからだ。

二の午の日の我が家は何時になく賑やかだつた。隣近所や稲荷講の人たちが集まり宴になるのだ。横丁に住む杵屋何某と云ふ長唄の女師匠が三味線を抱えて座敷に上がつて来ると、座が華やかになつたのを子供ながらに覚えてゐる。今年は三の午はないさうだ。

二の午や三味線の音も向島

### カサブランカ

四月のはじめにカサブランカの球根を植えた。ホームセンターで大きめの球根をふたつと、腐葉土・肥料を買ってきて説明書を片手にプランターに植えたのだ。順調に育てば七月の半ばには開花するだらう。勤めてゐたころにも同じやうに百合を植えたことがあつた。日常に疲れて、花が咲く七月まで何とか耐へやうと試みたのだつた。

今年の梅雨は長引いて七月半ばを過ぎても明けさうにない。咲いたカサブランカに今朝の雨が冷たい。八時半を過ぎたころ、傘をさして登校する小学生が家の前に行く。彼はうつむいてゐたが花の香に気付いたのか立ち止まり、真つすぐに前を視た。そして深呼吸をひとつしてまた歩き出した。今からでは遅刻かもしれないが、少年よ、真つすぐに前を視て行け。

朝の雨カサブランカのごと香れ

## 二軍でいいですよ

吉田 弘美

(てっせん)

テレビ画面で「えーとあの人」や「ほらドラマで主役の」とか、すぐ名前が出てこない。出てきても時間のずれで、会話は成立しない。

別の日、用事で二階へ移動したが、何の用事か思い出せず階下へ、のこともあつた。

同年代の八十歳代友人達から「俺もあるある」「私もよ」と同意の言葉が戻ってくる。加齢現象だよ、で話は円満に終つてしまう。みんなで渡れば怖くない式で何故か少しほつとしてしまうが、認知症の二軍登録メンバーであることは否定できない。

脳の働き低下を少しでも自力でカバーしようと、試していることがある。作文である。

月に一作、四百字詰め原稿用紙三枚に必ず手書きをする。不明文字は辞書をひく。

これが自分に課した作文の低いハードルだ。

長時間使ったパソコンなどのハードは封印し、押入

の奥へしまい込んだ。

でも最近、使い慣れた「専門」や「訪問」の漢字で、門の中に口があったか、などで辞書をひくことが多くなつたような気がする。

これは、一軍からの誘いか、まあ、二軍の範囲だよ、なか別の見方が必要なかもしれない。

作文が自力なら、他力でという見方か。

先日、近くの病院で採血があつた。同行していた家内が、採血室のボードに認知症新薬のポスターがあつたよ、という。

それには「治験とは、新薬の効能や安全性を確認する臨床試験をいう」と説明があつた。

治験担当は「このリーフを読み、了解されたら一階の『もの忘れ外来』へ」と案内してくれた。希望者が多く、待ち時間が長いですよ、とも言ってくれた。

じわじわと近づく認知症の気配に気付き、もの忘れ外来に申込み人が多いのかな、と変な納得もした。

この病気は、脳内のアミロイドベータという蛋白質が細胞を壊し、認知機能を低下させる、が現在の定義という。

治験の新薬は、もの忘れ程度で済む効果が期待でき

るそうだ。

対象は、五十歳から八十五歳で、一年以上前から「もの忘れ」が気になつている人。

新薬服用前、採血、MRIや心電図などに約五十日。服用に二十四か月。検査に三か月で計約二年半とか。長いなあ、と実感した。

人数は百五十名。藤沢市内でか、とよく見ると「日本で」とある。思わず二度見した。単純計算でも神奈川県で約三名、男女別や年代別を加えると選ばれる確率は、極めて低い。

しかし今後も、国内製薬メーカーや大学の治験は、数多くあると期待している。薬ではなくヘッドホンで治験中の大学もあるという。

近く、治験選出とか作文で無修正がきつとある。風評上飲んべえの自分に褒美として、シュークリームの大を用意する、と今から決めている。

## 林間煖酒焼紅葉

渡 辺 じゅん

(文芸光風)

庭の落ち葉を掃いていると、一陣の風が吹いてきて、集めた落ち葉を散らしてしまつた。落ち葉の行き先を追うと、楓の木の下のほた木に、椎茸が生えているのを見つけた。全部で七本、大きなものは笠の直径が十センチを超える。しかも肉厚だ。昨年の春には十数本生えて、美味しく頂いたのだが、その後は一本も生えることなく、すっかり忘れてしまつていた。このところ、暑からず寒からず、そして適度に雨が降つた。椎茸が生えるためには、それが良かったのだろう。

「これは天からの贈物だ。今日は日曜だし、もうすぐ日も暮れる。家には誰もいない。そうだ、今からこいつで、ちよいと一杯やろう。なんて素敵ぬるかんな思ひ付きだ。温燭ぬるかんで、椎茸の炭火焼きといこう。網の上でじゅうじゅう言い出したら、醤油をちよいとたらし、七味をふつて、熱々をフーフー言いながら頂く。堪こたえられないほど、旨いぞう。」

早速、庭に裸電球を点し、七輪に火を起こした。珙那のカップにお酒も用意した。そこへ「辻熊つじくま」がやつて来た。こんなことまで知つているのかと呆れるほどの物知りで、まるで博物学者みなかたくまくすの南方熊楠みなかたくまくすのような男だ。辻堂に住んでいるので『辻熊』と私が勝手にそう呼んでいるのだ。

「おつ、なかなかの椎茸だねえ。大きくて立派だねえ。でもホントはこういう大きいものより、もうちよつと小振りちよつとで、真ん中が盛り上がつているヤツが良いんだよ。丹沢の麓の農家では猿が群れで出てきて困っている。良い物はかりを好んで荒らすんだぞうだ。こんな笠の開いたヤツには見向きもしない。」

「おや、言つてくれるねえ。今から私は、笠の開ききつた、猿も食わないヤツを着に、一杯やるつもりで支度していたところだが、じゃあ君は、今日はこのまま帰るつて言うんだね。」

「いやあ、失敬失敬、失敗失敗。口が滑つてしまつた。博学なもので、つい余計な蘊蓄を傾けてしまつたよ。ごめんなさい。僕は猿より食意地が張つているから、もちろん、ご相伴あずかに与るよ。いやあ珍珠佳肴、好い匂いだあ、たまらん。僕の体中の六十兆個の細胞

が、口を揃えて『アン・デイ・フロイデ 歓喜の歌』を歌っているよ。」

そこで二匹の老猿は、日が西の山に將に沈まんとする頃、『林間に酒を煖めて紅葉を焼く』という風流を始めたのであります。

「秋刀魚もあるよ。食べるかい。」

## 継続は人と人とのふれあい

渡辺 春美

早朝、目が覚めたら雨が降っていました。今朝は散歩に行かなくていいなと思ひ、また寢床に入りました。とても幸せな気分でした。なぜならば、一生体を動かさなくてはいけないと医者に言われていたからです。いまから約八年前、体がいつもとは異なっていました。調子が悪く、ふらついて力が入らないのです。漠然とした気持ちで何軒かの病院に通いました。約一年間して、その中の一軒の病院でパーキンソン病と告知されました。いま、その時を振り返ってみると、医者に告知された時、目の前が真っ暗になり、全身に震え

が来た感じでした。自分自身がネガティブになり、一週間ぐらい悩み苦しみ、食事も喉に通らず、外出し人前に出るのがとても嫌でした。どうしても家の中にこもって考えてしまう自分がつらかったのです。医者に言われたのは、この病気は治らない進行性なので、だんだん体が動かなくなる、それを遅らせるには毎日体を動かし、肉體労働をしるということでした。その時から朝四時半に起きて引地川親水公園に散歩に行くようになりました。今朝のように雨が降る時は休むのです。今日まで散歩が続いたのはこの散歩で知り合った十人ぐらいの仲間達のお蔭です。毎朝挨拶をして簡単な会話でコミュニケーションを取り、雑談をして別れます。よく今まで続いたと思います。人と人とのふれあいがコミュニケーションだと思ひます。

僕の晩年の人生の計画は、とにかく体を動かすこととし、今月までを第一ステージとして散歩を基本にして来ています。次のステージは、体が自然に動き、楽しく頑張れ、体を動かすステップがあれば最高、それは昔習っていた社交ダンスではなく、アルゼンチンタンゴを習う事です。体はだんだん硬くなります。僕みたいな身体障害者は、一生懸命努力してもなかなか上

手にはなれませんが、死ぬまで体を動かす手段としたら、またそれをリハビリりとしてするなら良いのではな  
いかと思います。僕のようにずぼらで飽きっぽい人間  
は理屈をつけて実行していくという方法が一番合っ  
ていると思います。その他に週二回プールの中を歩いて  
います。他には週三回訪問リハビリりが来てマッサー  
ジをしてくれます。パーキンソン病になって約六年経ち  
ました。自分のできる範囲で体を動かし続けることが  
いかに大事か難しい事ですが、好きであるか、興味が  
あるか、という事が長続きのためには大事なことだと  
思います。

散歩、アルゼンチンタンゴ、プール、リハビリり等、  
それらを通じての人と人との付き合い、ふれあいがあ  
っても大事なことだと思えます。これから先、楽しく、  
知らず知らずの内に体が動かされ、楽しい会話ができ  
れば頑張れます。

最後に、これからすべての活動を支えてくれた妻に  
心から感謝したいと思います。